

家族の形と大切さ

秋田県大仙市立大曲中学校

三年 伊藤 千紗

突然の出来事だった。小学六年生の夏、私の母は天国へ旅立った。正直、母と交わした最後の言葉を私は覚えていない。

それから秋になり、冬が過ぎ、私は地元から少し離れた中学校に入学した。そこは大規模校で私はどんな生活が訪れるのかとても不安と期待が入り混じっていた。そんな中で小学校から始めたバスケットボール部に入部し、いろんな仲間と出会えた。目標を大きく「全国大会出場」と掲げて練習に励んだ。忙しい毎日の中でも、母のことはいつも心の中にあり、私は「ああ、母を『全国大会』という大きな舞台に連れて行きたい。」と思った。

練習が休みの日、私は友達の家遊びに来ていた。その友達の家族はみんな仲が良くケンカすることもあったが、笑顔が絶えない家族だった。私はうらやましかった。私の家族は父に姉が二人で、私を含め四人で遊びに行くこともないし、言葉を交わすことも少なく冷めているような家族だった。だから、母がいないことに少し寂しさを感じていた。

二年生の後期になり私は学級委員長を任された。その時周囲に認められたような気がしてうれしかった。しかし、やってみるとリーダーを務めるといっなのは、結構大変だった。また、部活動も忙しくなっ

てきており、ストレスと疲れがたまわって、家族に強くあたってしまうことが多くなった。それでも、私の気持ちは晴れなかった。

三年生になり、私たちの集大成、総体がやってきた。しかしその日は、高校生の姉もバスケの東北大会があり、父には、私の応援に来てもらえなかった。「母がいれば、私の試合を見てくれたのに。」私はそう思った。家族ってなんだろう、そう思う時もあった。それでも全県大会、全国大会まで行けば父も見えてくれるだろうと思いい、私は全力で戦った。だが、私たちの郡市は強豪校が集まる地域のため私の夏はすぐに終わってしまった……。悔しかった。とても悔しかった。もう自分でできることは何もないのだと思いいその時は涙が止まらなかった。

その日の夜、バスケット部でのお疲れさま会があった。保護者も集まり楽しんでた。けれどもやはりみんな悔しくてみんな泣いた。そうしたら友達のお母さんが、私に「よく頑張ったね、泣いていいんだよ。」と言ってくれた。この言葉にいろんな気持ちがあふれだし、私は目が腫れてしまうほど泣いてしまった。その後、夏休みが始まり、受験生としての生活が始まったが、私は今までにないくらい毎日遊びに出た。父は口には出さなかったが、あまり勉強していない私のことを心配していただろう。ちゃんと高校に入れるのか、と。

遊んでばかりの夏休みも後半に入り、私は後輩の試合を見に行った。その帰りは友達のお母さんを送ってもらった。その時、車の中で友達のお母さんから、「千紗のお父さん、東北大会と全国大会の日の分、休み取ってみたいだから、暇しててほしいよ。」と言われ、私は一瞬息が止まった。私が出られるかもわからない試合なのに見に来てくれようとしていたんだ。そのくらい自分にも期待してくれていたのだと思った。そのことにとってもうれしさがこみ上

げるとともに、今までの自分の態度を後悔した。自分の家族は冷めている、他の家族を見てうらやましいとか思っていたが、たくさん家族があればそれぞれの「家族の形」というものがあるのだなと気づいた。母がいなくて、とても寂しかったけれど、両親がいなくて、この世にはたくさんいるのだなと思いい、私は自分の家族に、家族の思いやりに、とても感謝した。

家族のみんなを母を全国大会に連れて行けなかったのは、悔しい。もっと練習をちゃんとしていれば……。そう思ってもそれはもう過去のこと、その日は戻ってこない。だからこの経験を生かして次に迫ってくる受験に向けて努力しよう、合格してみんなを喜ばせよう、私はそう決意した。

そして、これからは家族の一員として母がいない分、自分でできることをやり、家族みんなと協力していけたらいいなとも思った。来年からは姉が県外へ出ていってしまう、家には私と父の二人だけになってしまう。さらに、忙しい毎日になるけれど、家事をしっかりとこなして父に心配をかけないようにしていききたい。そして、姉が帰ってきたら「家族の時間」というものを大切に、家族の会話を増やしたい。そして母の分まで生きる、絶対にもう後悔のない人生を送る！私は天国にいる母にそう告げたい。家族は私を一番わかってくれる。何をすることもいなくてもはならない存在で、一生大切にしなければいけない人。その大切な家族と、ずっと笑顔で生きていきたい。